

「コンテンツ EXPO 東京 2019」を盛り上げた 「先端デジタルテクノロジー展」

神谷 直亮

リード エグジビション ジャパンが主催した「コンテンツ EXPO 東京 2019」が、4月3日から5日まで東京ビッグサイトで開催された。「先端デジタルテクノロジー」「映像・CG制作」「コンテンツ配信・管理ソリューション」など関連する7つの展示会で構成される大規模なもので1350社が出展した。本稿では「先端デジタルテクノロジー展」を中心にレポートする。

第5回を迎えた「先端デジタルテクノロジー展」の会場は、大きく分けて「VR・AR・MRワールド」「次世代映像ソリューション」「サウンドテクノロジー」の3つのゾーンに分かれていた。最大のスペースを占有して最も賑わったのは、「VR・AR・MRワールド」のゾーンで、ここでは最新のヘッドマウントディスプレイ（HMD）、VRシミュレーター、VR/ARコンテンツ・アプリケーションなどが紹介されていた。

まず、HMDのメーカーで目を引いたのは、中国のPicoテクノロジー、同じく中国を本拠とするクリーク・アンド・リバー（C&R）、ジャパンディスプレイの3社だ。

Picoテクノロジーは、すでに販売している「Pico G1」「Pico G2」に加えて、4月末に発売を予定しているという「Pico G2 4K」を前面に押し出して売込みに余念がなかった。「G2 4K」は、画素密度818ppiを誇るHMDで、今回の会場で試遊した製



写真1 Picoテクノロジーは、4月末に発売を予定しているという「Pico G2 4K」を出展し注目を集めた。

品の中で最も高精細映像を実現していた。CPUプロセッサは、Snapdragon 835で、本体の質量は276gである。

C&Rは、2017年に発売した551ppiの「IDEALENS K2+」と最新の「IDEALENS K4 4K Ultra HD」を目玉にして出展した。「K4」の画素密度を聞いて見たら773ppiとのことで「Pico G2 4K」に次ぐ性能を有している。

ジャパンディスプレイは、「VRM-100」と名付けたHMDを初出展して、多様なVRコンテンツの試遊を促していた。画素密度については、「当面は、市場への浸透を最優先として、615ppiの完成品でお客様の反応を見ることにした。一方で、818ppi、1001ppiディスプレイモジュールをすでに開発しており販売を検討している。4月9日から上海で開催されるCITE（China Information Technology EXPO）では、これら2種のモジュールを搭載したユニットでVR体験してもらう予定」とのことであった。

同社のブースの他に、アルファコードが「VRM-100」を使って来場者に体験を促しており、中国製に伍して日本製品が普及する兆しが見え始めていた。

上述した3社のHMD以外に、会場では「HTC VIVE」「HTC VIVE PRO」「Oculus Rift」「Oculus GO」「ミラージュ ソロ」「DPVR 4D」「サムスン Odyssey VR」「ホロレンズ」を使ったデモが行われており、厳しい売込み競争が行われている現状が浮



写真2 クリーク&リバーは、最新の「IDEALENS K4 4K Ultra HD」を主力に売り込んでいた。

き彫りになった。残念だったのは、第二世代の「ホロレンズ2」、スタンドアローン型の「HTC VIVE Focus」、視野角世界最大の220度を達成したという「Star VR」が見当たらなかった。

「HTC VIVE」「HTC VIVE PRO」は、後述するしのびや.com、イノテックメディア、ソリッドレイ研究所などが採用しており、普及率は一番高いように思われた。スクリーンパネルの解像度は「2880 x 1600 615ppi」であるが、3D空間サウンドを導入しており、アクションを伴うVRアプリケーションの分野では抜きん出ている。「Oculus Rift」「Oculus GO」も結構あちこちのブースで採用されており、現時点では、「HTC VIVE」に次いで浸透しているようだ。

レノボ社の「ミラージュ ソロ」を採用している事業者の代表格はフォービジョンで、同社の「歩ける全地球動画水族館」の試遊に使われていた。「外部機器を必要としない一体型なので、水族館と言うVR空間内を自由に移動するのに最適」とコメントしていた。

「ミラージュ ソロ」と同様に「全てを兼ね備えたオールインワンマシーン」を謳った「DPVR 4D」HMDを出展したのは、カジーコーポレーションだ。ユニークな機能としては、「見たいコンテンツの方向を向くだけで自動再生され、主要な操作に手を使わないですむこと」が挙げられる。

「ホロレンズ」を活用するデモで、最も注



写真3 ジャパンディスプレイは、初出展を飾った「VRM-100」の売込みに余念がなかった。

目を集めたのは、南国ソフトとポケット・クリエーズだ。南国ソフトは、「思うがままに空間を作り出し、簡単に共有できる」と謳った「WhiteRoom」を設営して、せきぐちあいみのライブペイントの実演を行っている。

一方のポケット・クリエーズは、MR技術を駆使する働き方革命をアピールした。ポイントは、MR空間を通じてリモートでのコミュニケーションやインストラクションを実現する点にある。担当者の難しい言い回しを引用すると「時空間情報を量子レベルで遠隔共有するMRソリューションの実現」と言うことになる。

次いで、VRシミュレーターを出展して来場者の人気を得ていたのは、アイロック、しのびや.com、イノテックメディア、クロスデバイスだ。

アイロックは、「T3Rシミュレーター」を2台並べて来場者に試乗・試遊を促していた。プロレーシングドライバーの体験ができるこのシミュレーター用には、日本では珍しいサムソンの「Odyssey VR」HMDが採用されていた。

しのびや.comは、VR特化型ライドマシーン「SIMVR（シンバ）」をブースの前面に押し出して体感希望者を募っていた。ピッチ、ヨー、ロールの3軸回転に加えて、上下の揺れ（96mm）を体感できるのが特色である。HMDには「HTC VIVE」が採用され、ブースの担当者は「すでに、ハウステンボスVRの館、プラサカブコン、ユーズランドなどに納入実績がある」と語っていた。

韓国から出展したイノテックメディアは、「VR ICARUS」と名付けたパラグライダーシミュレーターを紹介し、「観光スポットをスリルと楽しさを感じながら上空から満喫できる」とPRに余念がなかった。HMDには、「HTC VIVE」が使用されていた。

クロスデバイスは、自転車によるスピード運動型「サイクリングVR」を売り込んでいた。促されるままに「Oculus GO」



写真4 エヌジーシーは、中国製80インチ0.9mm Mini LED「AOTO CLD0.9」を出展して来場者の関心を呼んだ。

HMDを装着しペダルを漕ぐと、スピードに合わせて360度VR映像が次々に現れ実際に世界各地を走っているかのような体験ができた。

さらに、最新のVRコンテンツとアプリケーションが注目を集めた。この分野で関心を呼んだのは、ソリッドレイ研究所とビーライズだ。

ソリッドレイ研究所は、3人が同时对戦できるシューティングゲームの体験の場をブースに設けていた。同研究所のVR空間構築ソフトウェア「オメガスペース-H」と「HTC VIVE」HMDを駆使するマッチプレーヤー型VRコンテンツである。

ビーライズは、今回、消火訓練や工事現場の安全対策といった非常に現実的なVRアプリを中心に紹介していた。

「次世代映像ソリューション」のゾーンで注目的になったのは、エヌジーシー、シンユニティグループ、オムニバス・ジャパンだ。

エヌジーシーは、80インチMini LED「AOTO CLD0.9」、マルチ・コンテンツ・ビューワー、マルチ・タッチ・コンテンツ・エクスパンドに加えて、LG電子の透明OLEDディスプレイを参考出展した。「AOTO CLD0.9」は、名称が示す通り、中国のAOTO Electronics（奥拓電子）製でピクセルピッチ0.9mmを誇っている。

シンユニティグループは、高精細LEDビジョンに囲まれたステージで

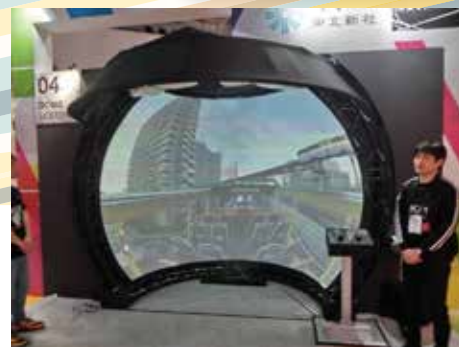


写真5 オムニバス・ジャパンは、半球ドーム型ディスプレイで、没入感のある映像を再生して来場者の目を引いた。

日本舞踊のパフォーマンスを披露して脚光を浴びた。リアルとバーチャルを繋ぐデジタルステージを創り上げることで演出の妙をアピールするのが目的と思われた。

オムニバス・ジャパンのブースでは、半球ドーム型ディスプレイで目を引いた。高さが3.6m、幅が2.7mのディスプレイで、BENQ製プロジェクター4台を使って上映された4Kの没入感に満ちた映像には、思わず引き込まれてしまった。

「サウンドテクノロジー」のゾーンで孤軍奮闘していたのはソニーだ。同社は、今回「Sonic Surf VR-Spatial Audio Technology」と言う難しいタイトルのデモを実施した。ソニー独自の波面合成技術で制御する128台の超小型マルチチャンネルスピーカーによる空間音響技術で、ブースの空間を日本語（中）、中国語（左）、英語（右）の3つのゾーンに区切って、それぞれクリアな音声の試聴を実現していた。

Naoakira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディア・ジャーナリスト

SWE DISH

緊急報道
ハイビジョン映像伝送
Ku-band/X-band

CCTスーツケース 90cmφ型 2タイプ有り
120cmφ型

衛星通信用超小型可搬アンテナ
Suitcase CCT Satellite Communications Terminal

5分で運用開始

IATA対応収納ケース
その他にも1ケース収納型から3ケース分割型など各種ケースあり

エーティコミュニケーションズ株式会社
http://www.bizsat.jp TEL: 03-5772-9125

A Communications k.k.